

## 臨床心理面接における関係性の捉え方に関する一考察 : 28人の心理臨床家へのインタビューから

佐竹, 圭介  
九州大学大学院人間環境学府

<https://doi.org/10.15017/15693>

---

出版情報 : 九州大学心理学研究. 6, pp.167-174, 2005-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

# 臨床心理面接における関係性の捉え方に関する —考察—

—28人の心理臨床家へのインタビューから—

佐竹 圭介<sup>1)</sup> 九州大学大学院人間環境学府

## A study on views of the nature of relationships in clinical psychotherapy —From interviews with 28 psychotherapists—

Keisuke Satake (*Graduate school of human-environment studies, Kyushu university*)

The importance of paying attention to the nature of client-therapist relationships in clinical psychotherapy is argued regardless of theory or school. However, such descriptions about the nature of relationships often are based on that particular author's orientation. In this paper, from the viewpoint that the uniqueness of psychotherapy lies in the specificity of the nature of its relationships, its aspects are examined based on the hypothesis that the essence of the nature of relationships in clinical psychotherapy is not dependent on theory or school of thought. As a result of analyzing an 28 interviews with psychotherapists, it was suggested that the following three aspects are involved in understanding the nature of relationships in clinical psychotherapy: 1) the stance of interviewing using relationships as a topic, 2) the stance of interviewing using relationships as a medium of communication, and 3) the stance of interviewing using relationships as a foundation. Regarding actual psychotherapy, it was suggested that each stance is not be fixed and be allowed to alternate fluidly, thus advancing the interview process.

**Keywords:** client-therapist relationship, three aspects of the view of nature of relationships, interview

### 1 はじめに

臨床心理面接において、クライアントとセラピストの関係性は、理論・流派にかかわらず重要な要因ととらえられている。しかしながら、その重要性はあらゆる場面で論じられている一方、それがどのような性質のものか、あるいは心理臨床場面においてそれがどのように扱われるべきであるかということに関しては、それぞれの論者のもつ理論や臨床観、あるいは記述の仕方にゆだねられており、その見解は一貫していない。しかしながら、心理療法の独自性はそこで生じる関係性の特異性にあり(滝川, 1998), そこには何らかの共通した性質があるのではないかと筆者は考える。

このような問題意識から、佐竹(2004)は、心理臨床家へのインタビューというかたちで臨床心理面接における関係性、特に初期の関係性について検討をおこなった。その結果、臨床心理面接において関係性が取りづらくなるような要因について、また初期の関係性を築くためにどのようななかかわりがおこなわれているかということにつ

いて、などいくつかの示唆が得られた。また、心理臨床家は関係性というものをどのようにとらえているか、ということについても検討をおこなったが、わずか28人の心理臨床家のなかでも実に多様な捉え方が表れており、「どのような状態にあるときに関係がとれていると感じるか」という視点での検討にとどまった。しかしながら、インタビューのプロトコルを検討するなかで、それぞれの心理臨床家の関係性の捉え方の多様性・多面性が認められる一方、いくつかの共通の捉え方もうかがえた。そこで本稿では、佐竹(2004)においておこなったインタビュー調査を「心理臨床家の関係性の捉え方」という視点で検討しなおし、そこから得られた知見を示し、さらにそれを既存の理論の関係性の捉え方と関連づけて論じることを試みる。

### 2 インタビュー調査の方法

佐竹(2004)でおこなったインタビュー調査は以下の通りである。調査の目的は臨床心理面接において、心理臨床家が初期の関係性についてどのようにとらえているかを検討するためであった。対象者はA大学の心理教育相談室において、相談員の指導員として登録している心理臨床家であった。調査協力者の内訳は、男性17名、

<sup>1)</sup> 本研究をまとめるにあたり、御指導いただきました九州大学大学院教授 吉良安之先生ならびに野島一彦先生に心よりお礼を申し上げます。また、本研究の調査に快く御協力いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。

Table 1  
インタビュー協力者の情報

平均年齢 (才)	44.04	理論・学派 (のべ人数)	精神分析	13	
年齢の標準偏差	6.45		来談者中心療法	9	
平均臨床経験年数 (才)	19.48		行動療法	2	
臨床経験年数の標準偏差	6.80		体験過程療法	2	
性別内訳(人)	男性		17	システム論など	4
	女性		11	臨床動作法	2
所属	大学		17	特になし	5
	病院	11			

Table 2  
調査協力者の概要と3つの様相の利用

管理 No	臨床現場	主によって立つ理論・学派					3つの様相の利用			
		精神分析	来談者 中心療法	認知行動 療法	体験過程 療法	システム 論など	臨床 動作法	第1の 様相	第2の 様相	第3の 様相
S 1	大学		○						○	
S 2	大学								○	
S 3	病院	○								
S 4	病院	○					○	△		
S 5	病院	○	○				△	△		
S 6	病院			○						△
S 7	大学	○					○	○		
S 8	病院	○					△	○		
S 9	病院	○					○	○		
S10	学生相談		○			○			○	
S11	大学		○				△	○		
S12	病院						○	△		
S13	大学	○					○	△		
S14	学生相談				○				○	
S15	病院						△	○		
S16	大学		○						○	
S17	大学				○				○	
S18	学生相談	○	○			○				
S19	病院	○					○	○		
S20	病院	○					○	○		
S21	大学		○			○			○	
S22	学生相談	○								
S23	大学								○	○
S24	大学	○					○	△		
S25	病院		○			○	△	○		
S26	病院			○				△		○
S27	大学	○	○						○	
S28	大学								○	○

○：プロトコルで言及 △：プロトコルから推測

女性11名であり、平均年齢は44.04才、平均臨床経験年数は19.48年であった（Table 1）。調査協力者の概要については Table 2 に示す。インタビュー期間は2003年10月から11月中旬までの約1ヶ月半であった。

インタビューは質問1と質問2に分けられた。質問1では調査協力者である心理臨床家が初期の関係性をどのようにとらえているか、ということについて質問をおこなった。質問2は、遠藤（1997）を参考にし、主に経営学の分野で発展してきた臨界事象法を用いておこなわれた。また、フェイスシートを用意し、調査協力者の氏名、年齢、性別、所属、臨床経験年数、業務内容、主によって立つ理論・学派について尋ねた。

質問1は、「先生が心理臨床をやっていくなかで、関係がとれる、関係がとれないということについて、どのようなことを考えられながらやっていたらっしゃいますか」という質問に対し、自由に語ってもらうというかたちでおこなった。そのなかでは、調査協力者が具体的な内容を記述できるように、語りのきっかけとして「日常生活での人間関係との違い」「どのようなときに関係がとれたと感じるか」などの質問を随時入れていった。

質問2は、「これまでにお会いになった事例のなかで『初期に関係のとりづらかった事例』を思い浮かべてください」という教示のもと、2つの事例を想起してもらっ

た。ひとつは、「最初、関係がとりづらいと先生が感じ、それに対して何らかの工夫や配慮をおこなったが、あまり関係がとれないまま、終結・中断となった事例」について、もうひとつは「最初、関係がとりづらいと先生が感じ、それに対して何らかの工夫や配慮をおこなったおかげで、関係がとれるようになり、面接過程が進んでいった事例」について話を伺った。それぞれの事例については、用意したフェイスシートに簡単な概略を記述してもらった。それぞれの事例についての質問は「関係がとりづらいと思った点」について確認をし、その後、「そのとりづらさに対しておこなった工夫や配慮」「それに対するクライアントの反応」「そのやりとりのときのセラピストの体験」「そのやりとりのときのクライアントの体験の推測」を反復して聞いていくということをおこない、最後に「関係がとれなかった事例」に関しては、「どのようにしていたら良かったか」、また「関係がうまくとれた事例」に関しては「どのような点が良かったか」ということについて尋ねた。インタビューの構造をまとめたものを Table 3 に示す。

以上のようなインタビュー調査の結果得られたデータをプロトコルとして記述した記録を再度、「心理臨床家の関係性の捉え方」という視点で再検討をおこなった。具体的な方法としては、まずプロトコルのなかから「心

Table 3  
インタビューの構成

質問1	「先生が心理臨床をやっていくなかで、関係がとれる、関係がとれないということについて、どのようなことを考えられながらやっていたらっしゃいますか」
	最初、関係がとりづらいと先生が感じ、それに対して何らかの工夫や配慮をおこなったが、あまり関係がとれないまま、終結・中断となった事例について
	「関係がとりづらいと思った点」 「そのとりづらさに対しておこなった工夫や配慮」 「それに対するクライアントの反応」 「そのやりとりのときのセラピストの体験」 「そのやりとりのときのクライアントの体験の推測」 「どのようにしていたら良かったか」
質問2	最初、関係がとりづらいと先生が感じ、それに対して何らかの工夫や配慮をおこなったおかげで、関係がとれるようになり、面接過程が進んでいった事例について
	「関係がとりづらいと思った点」 「そのとりづらさに対しておこなった工夫や配慮」 「それに対するクライアントの反応」 「そのやりとりのときのセラピストの体験」 「そのやりとりのときのクライアントの体験の推測」 「どのような点が良かったか」

理臨床家はクライアント—セラピスト関係というものを臨床心理面接のなかでどのように位置づけているか」についての言及を抽出した。その上でそれらをまとめる視点を検討していき、ある程度の視点ができたところでプロトコルに戻り、その仮の視点に沿った言及を再度抽出していった。この過程は数回繰り返された。これらの作業はすべて筆者ひとりでおこなった。

### 3 関係性の捉え方の3つの様相

検討の結果、臨床心理面接において関係性の捉え方は大きく3つの様相から捉えられることが示唆された。以下にそれぞれについて説明を加える。

#### 1) 関係を題材として面接をおこなう立場

臨床心理面接における関係性の捉え方の様相の第1のものは、臨床心理面接で生じているクライアントとセラピスト関係そのものを面接の題材として面接をすすめていこうとする立場である。例えば、面接のなかでクライアントはこれまでの生活史で培ってきた人間関係のパターンをセラピストとの間でも演じており、さらにそれは持ち込まれた問題の要因となっていると考えられた場合、セラピストはその人間関係のパターンを見立てたり、あるいはそれに対する自身に起こる感情を内省したりすることによってそれに気づき、そこに介入していくような面接が挙げられる。これは古典的精神分析理論における転移・逆転移の概念をふまえて、その分析をおこなう面接に見られる構造であると思われる。

ここで、どのくらいの心理臨床家がこのような関係性の捉え方に立ち面接をおこなっているかを検討するために、プロトコルのなかでこのような立場について言及している部分を抽出していった。検討は筆者ひとりでおこなった。その結果、28名中8名が関係を題材とする面接をおこなっていることを述べており、また、明確には述べていないが、質問2の回答として提示された事例を検討した結果、このような立場に立って面接をおこなっていると推測される心理臨床家は5名いた。この検討の結果はTable 2に示す。表中ではこの立場に立っていることについてプロトコルのなかで言及している場合は○、プロトコルのなかでは明確に言及していないがこのような立場に立っていると推測できる場合は△として示している。このような考え方が示されている典型的な発言としては、「面接とか治療の題材だったり媒介だったりとしての関係みたいなものもある」(S9)、「関係がとれるっていうのを聞いて、まず思い浮かぶのは、ふたりの間で転移関係・逆転移関係っていうのが生じてきて(中略)、それがふたりの間で起こってくるというようなことをまず思い浮かべます」(S13)、などがあった(カッコ内は

Table 2における調査協力者の管理番号)。

また、「主によって立つ理論・学派」として精神分析理論の諸学派を挙げた13名のうち、この立場に立った面接をおこなっていると考えられたのは9名であり、上述のようにこの立場が精神分析理論と関連があることも示唆された。

さらに、調査協力者の臨床現場ごとに検討していくと、この立場で面接をおこなうと考えられた12名のうち、8名が病院を臨床現場としていることが示された。このことからこのような立場で面接がおこなわれるのは、ある程度の病理性をもったクライアントを対象とした面接であると考えられる。また、インタビューのなかで、こどもとのプレイセラピーのなかでこのような立場をとるといことも述べられている(S24)ことから、情緒的、あるいは発達の困難から問題行動を示すこどもとのプレイセラピーにおいてもこのような立場でのかわりがおこなわれることも示唆された。

#### 2) 関係を媒介として面接をおこなう立場

臨床心理面接における関係性の捉え方の第2のものは、面接のなかで生じる関係性の治療的な性質を前提とし、それを媒介として問題解決をもたらしようとする考え方である。例えば、青年期的な悩みを抱えたクライアントが、面接のなかでセラピストに共感されたり、複雑な感情を理解・整理してもらったりするような、これまでにあまり体験してこなかったような関係性のなかで安心感を感じたり、自己理解を深めたりするような面接である。これに関連する理論としては、Moustakasの主張した「関係療法」(佐野, 1998)、Proutyのプリ・セラピー(岡村・保坂, 2000)などがあると思われるが、多くはRogers, C. R.の来談者中心療法やGendlin, E. T.の体験過程療法などの理論をふまえた面接に見られる構造であると考えられる。

この立場についてもどのくらいの心理臨床家がこのような立場に立った面接をおこなっているかについてプロトコルを検討した結果、28名中18名がクライアント—セラピスト間に生じる関係性の積極の意味について言及しており、さらに6名が明確には言及はしていないが提示された事例などからこの立場に立って面接をおこなっていることが推測された。プロトコルのなかでこのような考え方に言及しているものとして、「関係を活用したものが、心理療法っていう、心理面接だと思うからね」(S16)、「関係をつくること自体の方が、セラピーの目的になつとるような節はあるよね」(S17)といったものがあつた。

また、「主によって立つ理論・学派」ごとに検討をおこなったが、調査協力者のほとんど(28名中24名)がこの立場に立った面接をしていると考えられたため、上述

したような既存の理論との関連は検討できなかった。しかし、この結果からはほとんどの臨床心理面接において第2の様相が用いられていることが示唆される。

同様の理由で調査協力者の臨床現場との関連の検討もできなかったが、他の様相については言及せず、この様相のみについて言及した心理臨床家（S1, S2, S10, S14, S21, S27）はいずれも大学、あるいは学生相談を臨床現場として持っているため、この立場のみでおこなわれる面接は主に青年期的な問題を抱えたクライアントに対して有効であるということが推察される。また、本論で扱ったインタビューでは事例として提示されることはなかったが、精神病水準のクライアントに対して、自然に振る舞いながらそばにいて治療的な効果をもたらすという考え方（大石，2000）もこの立場の一例であると筆者は考える。

### 3) 関係を土台として面接をおこなう立場

臨床心理面接における関係性の捉え方の第3の様相は、まずセラピストに方法論・技法があり、クライアントがその方法に抵抗なくのってくるための土台として関係を築くことを狙う立場である。これは例えば、クライアントの問題を解決するためにはなんらかのトレーニングが必要であるとセラピストが見立てた場合、そのトレーニングに意欲的に参加できるようにまず自由に話せる雰囲気をつくりクライアントとセラピスト間で築こうとしたり、あるいはトレーニング内容をしっかり説明したりその効果の見通しを提示したりするかわりをするような面接の構造である。これは、関係性の存在を前提とする点では他の様相と同じであるが、問題改善の要因をその関係性ではなく技法に帰属するという点で他の様相と区別できる。このような面接の構造は、認知行動療法やブリーフセラピーとまとめられるさまざまな技法・理論のもとでおこなわれる面接で見られるものと思われる（ただし、これらはあくまで個々の理論・技法がもつ治療論上の話であり、これらの技法が実際の面接で関係性の積極的意味を無視しているということではない）。

どのくらいの心理臨床家がこの立場に立った面接をおこなっているかについて検討した結果、28名中3名が何らかの技法やワークの前提条件として関係性を捉えているということについて言及し、さらに1名がこのような立場で面接をおこなっていることが推測された。プロトコルのなかで、このような考え方に言及しているものとして、「嫌なことでもちょっと信頼してやっていただくための関係づくり」（S26）、「僕らはやっぱり動作の有効性みたいなものを、直接的な有効性っていうか、それをやっぱり、体験的なことをやってるものですから、どうしても、関係だけじゃなく、そのことによる直接効果っていうか、そういうものもね、考えながらやってるけど」

（S23）、といったものがあつた。

また、この立場に立った面接をおこなっていると考えられた4名はいずれも「主によって立つ理論・学派」として認知行動療法、臨床動作法を挙げており、この立場がこれらの理論と関連があることも示唆された。

さらに調査協力者の臨床現場との関連を検討すると、「主によって立つ理論・学派」を認知行動療法とした2名（S6, S26）は病院を臨床現場としており、臨床動作法を挙げた2名（S23, S28）は大学を臨床現場としていた。このことから理論や技法と対象者との関連はあるが、この立場と面接の対象者の関連は見いだせなかった。しかしながら、このような立場は面接でおこなうことについて合意を取れることを関係がとれることと同義に捉える立場であるため、対象者が特に疎通性が損なわれていないことが前提であると筆者は考える。

## 4 3つの関係性の捉え方の様相のそれぞれの関連

以上、28人の心理臨床家へのインタビューのプロトコルを詳細に検討した結果得られた関係性の捉え方の3つの様相について述べたが、Table 2 に示されているように、これらはひとりの心理臨床家はいつも同じ捉え方で面接をおこなう、とか、ひとつの事例において一貫して同じ立場で関係性が捉えられる、といったことではない。提示された事例を検討すると、事例によって関係性をどう扱っていくかは柔軟に変えられており、ひとつの事例でも事例の経過によって扱い方が変化することもあり得るようなものであることが示唆された。つまり、それぞれの様相ははっきりと区別できるものではなく、常にお互いを移行するような流動性をもち続けているものであろう。そこで、この仮説を明確にする意味も含め、それぞれの様相がどのように関連しあっているかについて以下、考察する。

まず、前述の通り、それぞれの様相は独立したのではなく、部分的には重なるところがあるようなものであるが、「関係を題材として面接をおこなう立場（第1の様相）」と「関係を媒介として面接をおこなう立場（第2の様相）」、あるいは第2の様相と「関係を土台として面接をおこなう立場（第3の様相）」はそれぞれ重なる部分はあるが、第1の様相と第3の様相は重なる部分がないと言える。この構造を図に示すと Fig.1 のようになるであろう。

また、それぞれの様相はその立場ひとつでおこなう心理臨床家は多くなかった（28人中8人）。つまり、実際の臨床場面では、ふたつ（第1の様相と第2の様相、あるいは第2の様相と第3の様相）の様相を同時に用いながらの面接がほとんどである。例えば、第1の様相のみ

でおこなわれる面接では、面接関係を転移現象の現れと考えるため、セラピストは自分をあくまで「分析の隠れ身」のうちにおいて、クライアントの転移感情を十分に投射できる「白紙のスクリーン」(Kahn, 1991)として存在するような構造になると思われる。しかしながら、今日、このような構造での面接がおこなわれるとは考えにくく、本論の検討結果を見ても、第1の様相のみで面接をおこなっていると思われる心理臨床家はひとりもいなかった。つまり、関係の捉え方の様相としては第1の様相は示唆されるものであるが、実際の面接では第2の様相が同時に生じていることがほとんどであると思われる。

同様に、第2の様相と第3の様相の両方を意識しながらおこなわれる面接、すなわち、クライアントとセラピストの人間的な関係を土台として、その雰囲気とセラピストの専門的な方法論・技法との相互作用によって面接過程を進めていくような面接も少なくない。Fig.1では便宜的に認知行動療法やブリーフセラピーを第3の様相の領域に配置しているが、認知行動療法でも患者—治療者関係の間で生じる雰囲気は重要な治療効果の操作要因であると言われる(山上, 1993)。本論における検討においても、つまり、第1の様相と同様に、第3の様相についても第2の様相が含まれないような技法中心の面接は実際の面接ではごく少数であると思われる。

### 5 3つの様相の視点から見た心理臨床の理論・学派

今回のインタビュー調査の対象者によって回答された「主によって立つ理論・学派」は大きく6種に分類された。ここで、それぞれの理論・学派をベースに面接をおこなっている心理臨床家がどの様相を主に用いているか、ということの本論の検討結果をもとに考察する。

まず、精神分析理論をベースに面接をおこなっている心理臨床家についてであるが、「主によって立つ理論・学派」としてこれを挙げた対象者は28名中13名であり、そのうち7名が第1の様相の視点から関係性を捉えていると述べている(Table 2)。また、第2の様相の視点から関係性を捉えているのは6名おり、インタビューにおける質問2の回答から推測できる場合(Table 2中の△)も含めれば、10名が該当する。第3の様相から関係性を捉えている心理臨床家はいなかった。このことから、精神分析理論を臨床実践のベースとしている心理臨床家は主に第1の様相と第2の様相を用いながら面接をおこなっていることが示唆される。このことを図示するとFig.1のように第1の様相と第2の様相にそれぞれ同程度にかかわるということになるだろう。

次に来談者中心療法についてであるが、「主によって

立つ理論・学派」としてこれを挙げた対象者は28名中9名であり、そのうち第2の様相の視点から関係性を捉えていると回答したのは7名いた。そのうち、3名については第1の様相の視点から関係性を捉える場合があることがプロトコルから推測された。すなわち、来談者中心療法をベースに実践をおこなっている心理臨床家は、第2の様相を中心にしながら、ときに第1の様相を利用していることが示唆された。このことを図示すると、Fig.1のように、大部分は第2の様相にかかわりながら、第1の様相にも部分的にかかわるというかたちになるだろう。

認知行動療法を「主によって立つ理論・学派」として挙げた心理臨床家は、28名中2名であった。そしてそのどちらもが第3の様相によって関係性を捉えていると回答、もしくは推測された。さらにそのうち1名は第2の様相からも関係性を捉えていると推測された。サンプル数が少ないため実証性に乏しいが、本論の検討においては、認知行動療法をベースに実践をおこなっている心理臨床家は第3の様相を中心にしながら、第2の様相も利用する場合があるということが示唆される。このことを図示すると、Fig.1のように第3の様相に大部分にかかわりながら、第2の様相にも部分的にかかわるということになるであろう。

「主によって立つ理論・学派」として体験過程療法を回答した心理臨床家は、28名中2名であった。そして、そのどちらもが第2の様相のみで関係性を捉えていると回答した。サンプル数が少ないため、実証性は乏しいが、本論の検討においては、体験過程療法をベースに実践をおこなう心理臨床家は第2の様相で関係性を捉えていると言える。このことを図示すると、Fig.1のように、第1・3の様相にはかからず第2の様相の領域のみに位置するというかたちになるだろう。

「システム論など」とまとめられた理論・学派は主に家族療法、コミュニティアプローチなど、システム論を基盤においたものである。これを「主によって立つ理論・学派」として挙げた心理臨床家は28名中4名であった。そしてそのうちの3名は第2の様相によって関係性を捉えていると回答した。さらにそのうちの1名は第1の様相からも関係性を捉えていると推測された。サンプル数がやや少ないため、明確には言えないが、システム論を基盤においた理論をベースに実践をおこなっている心理臨床家は第2の様相を中心にしながら、ときに第1の様相を用いる場合があるということが示唆される。このことを図示すると、Fig.1のように第2の様相に大部分にかかわりながら、第1の様相にも部分的にかかわることとなるだろう。加えて、ここで出てきた4名はいずれも「主によって立つ理論・学派」として「システム論など」とともに「来談者中心療法」も挙げていることから、両理論がお互いに親和性を持っていることも示唆された。

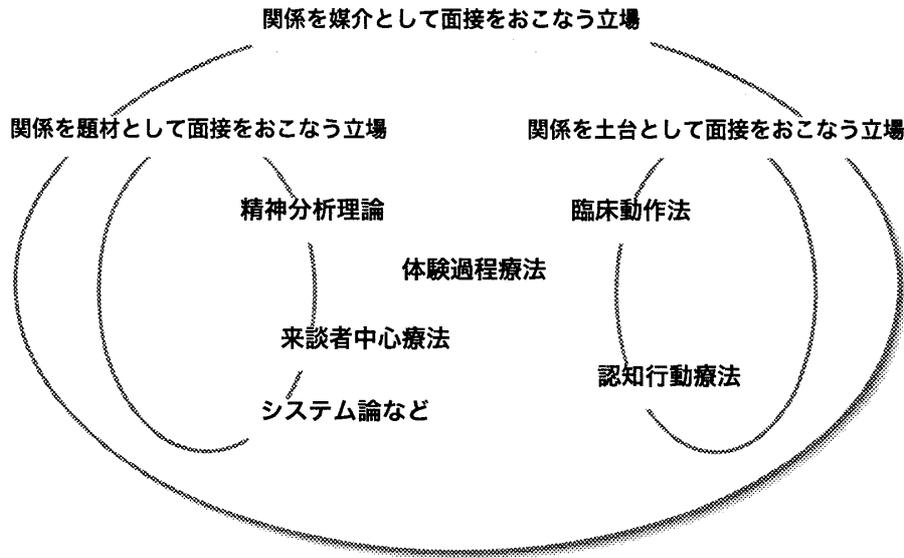


Fig.1 関係性の捉え方3つの様相の関連

最後に、「主によって立つ理論・学派」として臨床動作法を挙げた心理臨床家は、28名中2名であった。この2名はいずれも第2の様相と第3の様相で関係性を捉えると回答していた。サンプル数が少ないため、実証性に乏しいが、本論の検討においては、臨床動作法の考え方をベースに実践をおこなう心理臨床家は第2の様相と第3の様相の視点で関係性を捉えているということが示唆された。このことを図示すると、Fig.1のように第2の様相と第3の様相、それぞれに同程度かかわるかたちで配置されると思われる。

以上、既存の理論と本論で検討された3つの様相との関連を考察したが、これはあくまで概念上のものであり、実際の臨床心理面接においておこなわれる臨床心理行為がこのようにはっきり分けられるという訳ではない。また、本論では6つの理論について検討したが、ここで扱われなかった理論が、この3つの様相の観点からはどのように捉えられるかを検討することも意味のあることと思われる。

## 6 おわりに：本論文の意義と今後の展望

心理臨床に携わるものにとって、クライアントと関係をもつことの重要性は自明のことであり、今更論ずることではないかもしれない。にもかかわらず、心理臨床の分野ではあらゆる書籍、論文、講演、事例検討などにおいて、関係性の問題についてはさまざまな視点から論じられている。これは、すでに述べたような、心理臨床の独自性はその関係性の特異性にあるという主張のひとつ

の表れではないだろうか。数ある理論・学派を統合していくという、心理臨床の現在の流れがあるが、関係性の本質を明らかにしていくことはその流れの一助となりうるものである。特に心理臨床の独自性がその特異性にあるという視点から見ると、このような作業は決して意味のないことではなく、むしろ必要不可欠であると思われる。

本論は実際に心理臨床をおこなっている心理臨床家へのインタビューを検討して得られたデータを用いているため、ある程度、実際の臨床場面に即した視点が示されていると思われるが、検討については筆者ひとりでおこなったものであるため、あくまで主観的な検討となっている。そのため本論の示す知見は仮説の域を出るものには決してない。今後はこの仮説に一般性をもたせるように、グラウンデッドセオリーアプローチやKJ法などの質的研究において用いられる方法論によって多数の評定者とともに検討をおこなった上で、この仮説をさらに精錬する必要があるだろう。そして、得られた知見を再度、心理臨床家を対象にしたインタビューをおこない、実際の心理臨床場面の構造と照合させることによって、より現場に即した知見となると思われる。あるいは、得られた知見をもとに質問紙を作成し、理論・学派や臨床実践現場の異同といった要因との関連を見るような数量的研究をおこなうことで、より客観的な結果を導くことも必要であろう。また、本研究で用いたようなインタビュー法は研究者の意図するデータが得られる利点がある反面、対象者の回答は過去のことを想起したものになっているため、さまざまなバイアスが生じやすいと思われる。そ

のため、さらに臨床場面に即した検討をおこなうために、ロールプレイングを援用した実験的方法を用いたり、実際の面接過程のなかで生じた関係性の変遷を事例研究的に検討したりするなどの方法論を適用することが考えられる。いずれにしても、本論で得られた仮説は実証的研究においてその妥当性を検討することが必要不可欠であり、さらにその仮説を再度、臨床場面に戻していくための方法論の工夫は今後の課題であろう。

### 引用文献

- 遠藤裕乃 1997 心理療法における治療者の陰性感情の克服と活用に関する研究 心理臨床学研究 15(4), 428-436.
- 遠藤裕乃 1998 心理療法における治療者の陰性感情と言語的応答の構造に関する研究 心理臨床学研究 16(4), 313-321.
- 遠藤裕乃 2000 逆転移の活用と治療者の自己開示 神経症・境界例・分裂病治療の比較検討を通して 心理臨床学研究 18(5), 487-489.
- Khan, M. 1991 *Between Therapist and Client: The New Relationship*. W. H. Freeman and Company. 園田雅代(訳) 2000 セラピストとクライエント フロイト, ロジャーズ, ギル, コフォートの統合 誠信書房
- 村山正治編 2003 ロジャーズ学派の現在 (「現代のエスプリ」別冊) 至文堂
- 小川幸男 1999 「ラポール(rapport)」形成に関する一考察 —クライエントの体験を中心として— 北九州大学文学部紀要(人間関係学科) 6, 45-50.
- 岡村達也・保坂亨 2000 パーソンセンタード・カウンセリングにおける「治療的人格変化の必要十分条件」の技法論的展開 第1条件の見直しからプリーセラピー, 反射の復権へ 心理臨床学研究 18(3), 299-304.
- 大石英史 1997 「抱え」によるアプローチが関係への依存を誘発した一事例 過食症難治例への対応をめぐって 心理臨床学研究 14(4), 436-447.
- 大石英史 2000 病者とのかかわりのなかで生起する「治癒の場」 心理臨床学研究 18(3), 233-242.
- 佐野秀樹 1998 関係療法のプロセス—Moustakasを中心に— 東京学芸大学紀要(1部門) 49, 71-75.
- 佐竹圭介 2000 ラポールに関する心理学的研究 北九州大学文学部人間関係学科卒業論文(未公刊)
- 佐竹圭介 2004 臨床心理面接における初期の関係性の様相とその形成のためのかかわりに関する研究 —心理臨床家へのインタビューを通して— 九州大学大学院人間環境学府修士論文(未公刊)
- 斯波涼介 2002 「ラポール形成」に関する研究の展望 東京学芸大学教育相談研究 40, 61-66.
- Sullivan, H. S. 1954 *The Psychiatric Interview*. W. W. Norton & Company Inc., New York. 中井久夫・松川周二・秋山剛・宮崎隆吉・野口昌也・山口直彦(共訳) 1986 精神医学的面接 みすず書房
- 滝川一廣 1998 精神療法とはなにか(星野弘・滝川一廣・五味淵隆志・中里均・伊集院清一・鈴木瑞実・鈴木茂 1998 治療のテルモピュライ —中井久夫の仕事を考え直す— 星和書店, 37-79.)
- 山上敏子 1993 行動療法とはなにか 精神医学 35(12), 1252-1263.